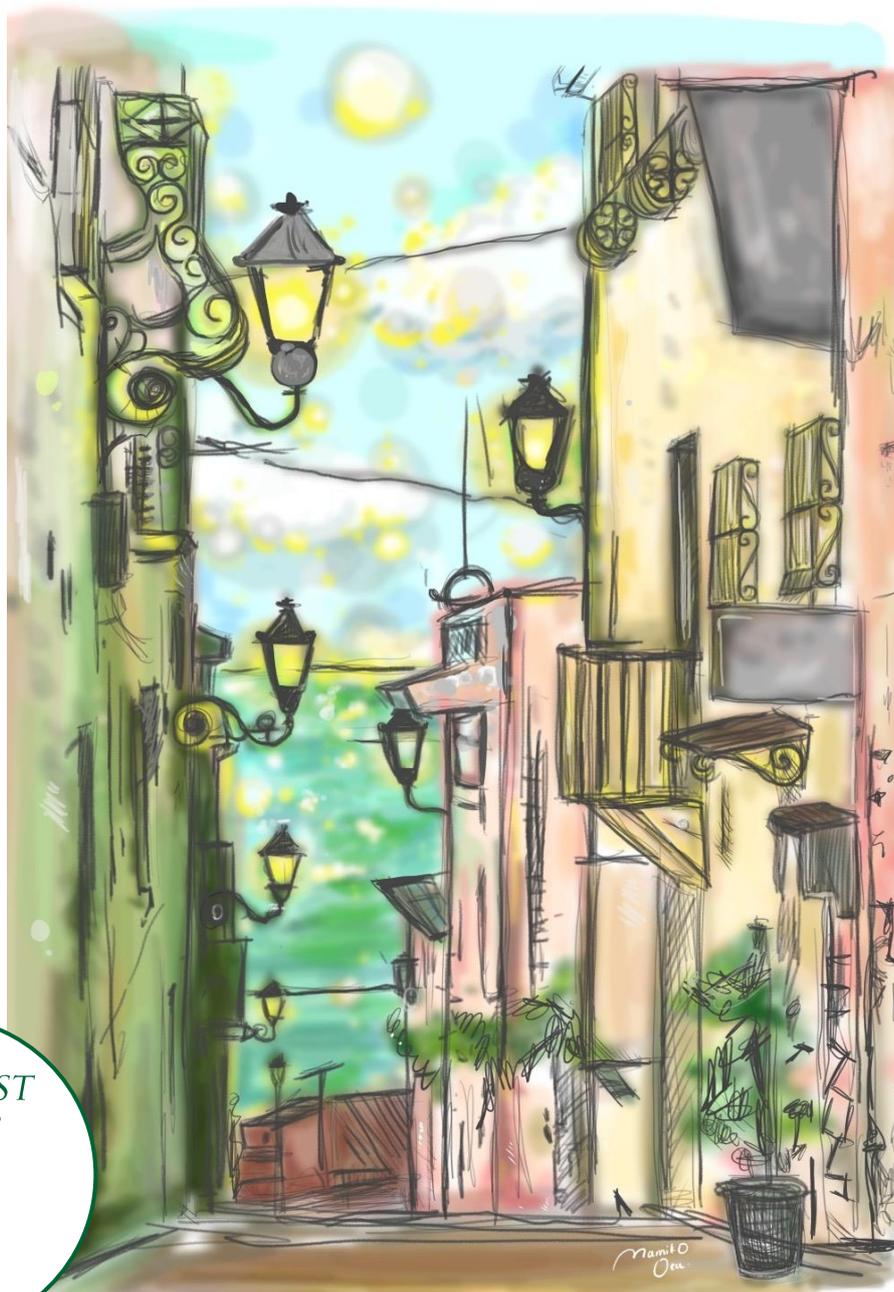


JIE

JOURNAL OF INCLUSIVE EDUCATION
PRINTED 2022.0830 ONLINE ISSN: 2189-9185
PUBLISHED BY ASIAN SOCIETY OF HUMAN SERVICES



AUGUST
2022
11

MAMIKO OTA

[IN THE CIRCLE OF THE STREET LIGHTS]

ASIAN SOCIETY OF HUMAN SERVICES

ORIGINAL ARTICLE

コロナ禍前後における「エントリーシート」 の質的变化

—質問項目の分析を中心に—

Consideration on Qualitative Changes in the Job Application Before and After the COVID-19 Pandemic; Focusing on Qualitative Changes in Question Items

上野 恵美¹⁾ 趙 彩尹^{1)*}
Megumi UENO Chaeyoon CHO

1) 下関市立大学大学院 経済学研究科
Graduate School of Economics, Shimonoseki City University

<Key-words>

新型コロナウイルス感染症, テキストマイニング, エントリーシート, 就職活動,
COVID-19 text mining job application job hunting

(*責任著者) cho-c@shimonoseki-cu.ac.jp (趙 彩尹)

Journal of Inclusive Education, 2022, 11:83-93. © 2022 Asian Society of Human Services

ABSTRACT

2019年から始まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）によって、人々の日常生活が奪われ、行動制限の中で生活することとなった。コロナ禍の中、次世代を担う大学生の新卒採用において、企業等がどのような経験や能力を把握したいと考えているのかを確認し、今後のキャリア教育の内容に反映させることが本研究の目的である。本研究においては、大学生の就職活動の選考における初期段階で、選抜のために使われるエントリーシートに着目した。エントリーシートでは学生生活での経験を問う内容が多いが、コロナ禍の行動制限がある中で、それに答えることのできる内容は、コロナ禍前に学生生活を過ごした大学生と比較すると圧倒的に少ないと考えられる。そのため、エントリーシートの質問項目が大きく変化したのではないかという仮説を立てた。収集したエントリーシートをコロナ禍前後で比較するため、テキストマイニングによって分析を行った結果、コロナ禍前には画一的な質問項目が多かったがコロナ禍後においては、多角的な質問項目が増えたことが確認できた。また、「学業」「興味」「資格」という、コロナ禍においても一人で取り組みやすい質問項目が増えているという、興味深い結果が確認できた。

Received
30 June, 2022

Revised
27 July, 2022

Accepted
9 August, 2022

Published
30 August, 2022

I. 背景

2019年、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、中国から発症した新しい感染症であり、全世界に拡大した。内閣府の調査で、日本でも経済活動や生活様式に大きな影響を与えたことが確認された¹⁾。2020年4月に新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が発出され、これに伴い、企業・団体においても、テレワークなどへの移行など、これまでの働き方を大きく変化せざるを得なかった。さらに、堀の研究においても、新型コロナウイルス感染症が大学生の就職活動やキャリアの選択にも大きな影響を与えたと述べている²⁾。

大学生の就職活動において、コロナ禍前の企業説明会や採用試験などは、対面を中心に行われていたが、新型コロナウイルス感染症の感染予防のため対面での実施はなくなり、オンライン対応に変更された。このような変化の中、採用試験の初期段階の選考で大学生が企業に提出する「エントリーシート」の質問項目はどのように変化したのかを分析する。

「エントリーシート」とは、企業など大学卒業予定者を採用する側が、就職希望者に記入させる質問形式の応募書類であり、企業等が独自に作成しているものである³⁾。内閣府から毎年公表している「就職・採用活動に関する要請」に示されている通り、日本の大学卒業予定者を対象とした企業等の採用活動は、新卒一括採用方式である⁴⁾。そのため、大学生の就職活動開始時期には、企業等に大量の応募が殺到する。企業等は応募した大学生全員に対して、筆記試験や面接を課したいところであるが、全員を採用対象として行うための時間や費用が足りない。そこで、採用試験の第一段階としてエントリーシートの提出を課し、就職希望の大学生が提出したエントリーシートの回答から、その企業等が求める人材像に当てはまっているか否かを確認し、選抜を行う。

第一段階の選抜を勝ち抜くために、本来はエントリーシートの質問項目に対して、応募した大学生がどのように記述したかという内容が重要である。このことから、エントリーシートに関する先行研究では、大学生が記述した回答・内容を分析する研究が多く行われているが、企業等が出題する質問項目を中心とした分析研究は少ない⁵⁾。

そこで、本研究の目的は、次世代を担う大学生の新卒採用において、企業等が提供するエントリーシートを用いて、大学生が持つ経験と能力を把握するために、どのような質問項目を設定しているのかを分析する。そうすることで、今後新たなるパンデミックが発生したとしても、キャリア教育において対応できる対策を含め、パンデミック下において企業等が求める人材の要素を探索し、今後につなげていくために本研究を行うものである。

II. 研究方法

1. コロナ禍前後の定義

本研究において、以下の根拠に基づき、コロナ禍前後の定義を定めた。

- ・コロナ禍前：2021年卒（2020年に大学4年生）以前

上記のように定義した根拠として、2020年に新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が発令された際、まさに就職活動をしていた学生が2021年3月卒業生であり、彼らは大学3年生終了時までコロナ禍の影響を受けなかった世代である。一般的に、エントリーシートの質問項目は就職活動が始まる前までの大学1年生から3年生までの学生生活のことを問う内

容となっているため、この世代までをコロナ禍前と定義する。

- ・ コロナ禍後：2022年卒（2020年に大学3年生）以降

上記のように定義した理由として、2022年3月卒業生の世代は大学3年生から4年生の2年間、コロナ禍にあったためである。3年生は、例えば専門的な講義や海外経験、部活動やアルバイトの中で指導的な立場となって後輩をまとめるといった貴重な経験のできる学年である。その重要な1年間での経験が、大学生活の行動制限の中で奪われてしまったとしたら、エントリーシートにエピソードが書きづらくなると推察できる。このことから、2022年3月卒業生以降をコロナ禍後と定義する。

2. 仮説

エントリーシートの質問項目を分析する中で、以下のように仮説を立てる。

1) コロナ禍前後で内容に相違点が見られた場合

「学業」や「資格取得」などのコードは一人でも行える取り組みである為、コロナ禍前後で相違点が見られると予想される。また、新たな質問項目が問われる可能性も考えられる。

2) コロナ禍前後で相違点が見られなかった場合

- ・ 学生時代の「エピソード」や自身の「強み」などのコードは、前年度と質問項目を大きく変えることのデメリットがあると考えられるため、コロナ禍前後で相違点は見られないと考えられる。例えば、学生にとっては、エントリーシートで問われると考えて事前に準備をしておいた内容が使用できなくなる可能性や、企業にとっては、それ以前の学生との比較ができなくなってしまう可能性があると考えられる。
- ・ コロナ禍においても、感染対策に対して工夫をすれば出来ることも多く、むしろその努力を確認したいため、質問項目を変更しなかった可能性があると考えられる。

3. 研究方法

1) データの基本情報

(1) エントリーシート

- ・ 株式会社ダイヤモンド・ヒューマンリソースが実施した「ダイヤモンド就活ナビ モニターレポート ES 設問集」を利用する。
- ・ エントリーシートのデータは、コロナ禍前を「2020年卒」「2021年卒」のものとし、コロナ禍後を「2022年卒」「2023年卒」のものとして扱う。

(2) 調査対象・調査期間

2020年卒：2020年3月卒業予定の大学院生・大学生

2018年6月～2019年3月に回収・編集

2021年卒：2021年3月卒業予定の大学院生・大学生

2019年6月～2020年3月に回収・編集

2022年卒：2022年3月卒業予定の大学院生・大学生

2020年6月～2021年3月に回収・編集

2023年卒：2023年3月卒業予定の大学院生・大学生

2021年6月～2022年3月に回収・編集

各年、毎月1,000人程度のモニターから有効回答数の中から抽出

(3) 調査方法

WEB入力フォームより回答、オンライン、面談時に回収など

2) データの分析方法

エントリーシートの分析にはテキストマイニングの分析を行い、統計ソフト<KH Coder3.Beta.03i>^{6,7)}を用いて以下の分析方法を行う。

(1) 共起ネットワーク分析

テキストマイニングの共起ネットワークを用いて概観を捉える。共起ネットワークとはテキストマイニングの分析方法の1つである。テキスト型データの中で文章に含まれる言葉を抽出してその頻度を集計し、同時に使用される概念を線で結んでネットワークを可視化することで、視覚的にデータの全体像を把握することができるものである。

(2) コーディング分析

コーディング分析を行う前に、コーディングルールを決めるため、統計ソフト<KH Coder3.Beta.03i>^{6,7)}にある「Keyword in context; KWIC コンコーダンス」を用いて、コーディングルールを表1に作成した。さらに、コーディングルールのコード名に基づいてクロス集計の χ^2 検定を行い、コロナ禍前後の特徴を検討する。

表1 コーディングルール

コード名	コーディングに用いた主な語
ガクチカ(*)	大学、学生、力、工夫、取り組み、取り組む
志望理由	志望、理由、動機
挑戦	挑戦、取り組み、実現、目標、成果、課題
学業	ゼミ、研究、学業
エピソード	エピソード、具体、行動
挫折	人生、挫折
経験	経験、学生、大学
実現	当社、入社、実現
チーム	チーム、組織、メンバー、役割、目標、成果、貢献
強み	強み、長所、自身
興味	興味、関心
職種	希望、職種
資格	取得、簿記、運転、語学、資格

(*)「ガクチカ」とは学生時代力を入れて取り組んだことの略である。

III. 結果

1. エントリーシートの基本データ数

エントリーシートの基本データ数は合計 697 件であり、より詳細については表 2 の通りである。業界数には、金融業、卸売業、製造業、情報通信業などが含まれており、企業数は匿名であるが、大企業が中心である。

表2 エントリーシートデータのデータ数

	対象	業界数	企業数
コロナ禍前	2020年卒	10	181
	2021年卒	9	157
コロナ禍後	2022年卒	9	169
	2023年卒	9	190

2. 共起ネットワーク

1) コロナ禍前のキーワード

コロナ禍前は「2020年卒」および「2021年卒」の大学生を対象にしたエントリーシートを用いて分析した。対象としたエントリーシートの企業数については、2020年卒は181件、2021年卒は157件であった。

図1は2020年卒を対象としたコロナ禍前の共起ネットワークの結果である。線の太さは、語同士の共起の強さ、円の大きさは、語の出現頻度を示している。2020年卒においては、「志望理由」と「学生時代に力を入れたこと」が出現頻度の高い語となっている結果が得られた。

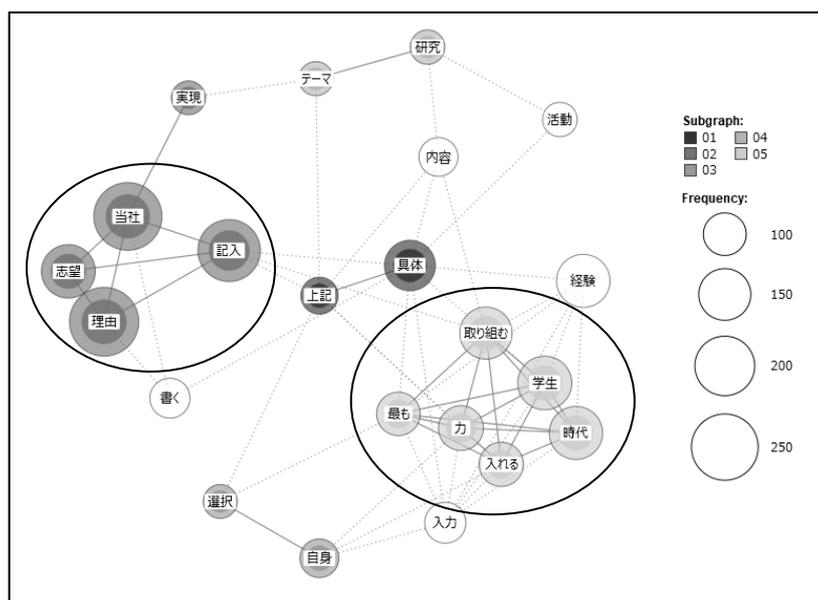


図1 2020年卒(コロナ禍前)共起ネットワーク

図2は2021年卒を対象としたコロナ禍前の共起ネットワークの結果である。2021年卒においては、「志望理由」と「学生時代に力を入れたこと」に加えて「学業」が出現頻度の高い語となっていた。

図1と図2を検討した結果、全体的な傾向として、コロナ禍前には、頻出語のバリエーションが少ないことから、どの企業のエントリーシートにおいても、比較的同じような質問項目が多かったことが確認できた。

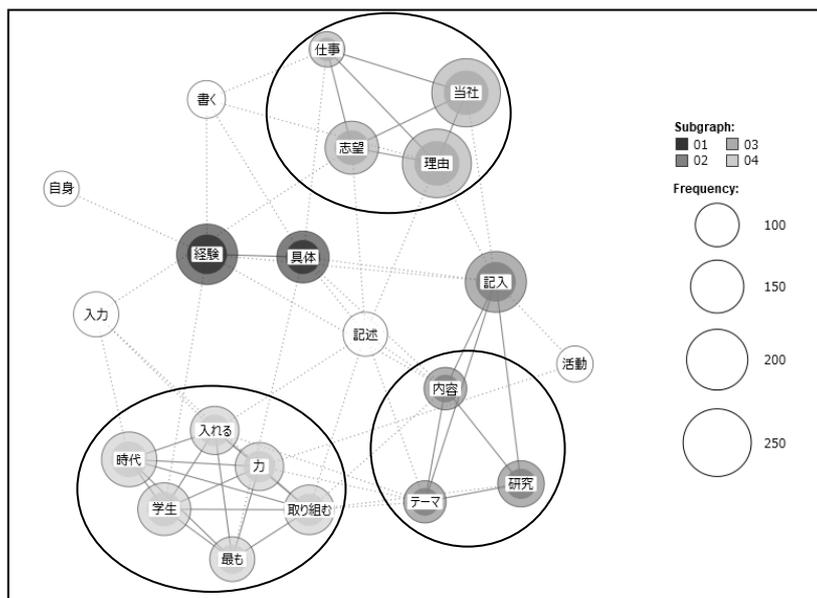


図2 2021年卒(コロナ禍前)共起ネットワーク

2) コロナ禍後のキーワード

コロナ禍後は「2022年卒」および「2023年卒」の大学生を対象にしたエントリーシートを用いて分析した。対象としたエントリーシートの企業数については、2022年卒は169件、2023年卒は190件であった。

図3は2022年卒を対象としたコロナ禍後の共起ネットワークの結果である。2022年卒においては、コロナ禍前の「志望理由」、「学生時代に力を入れたこと」、「学業」に加えて、「活動への取り組み」や「希望職種」、「具体的なエピソード・行動」が出現頻度の多い語となっており、頻出語のバリエーションがコロナ禍前よりも多くなっている結果が得られた。

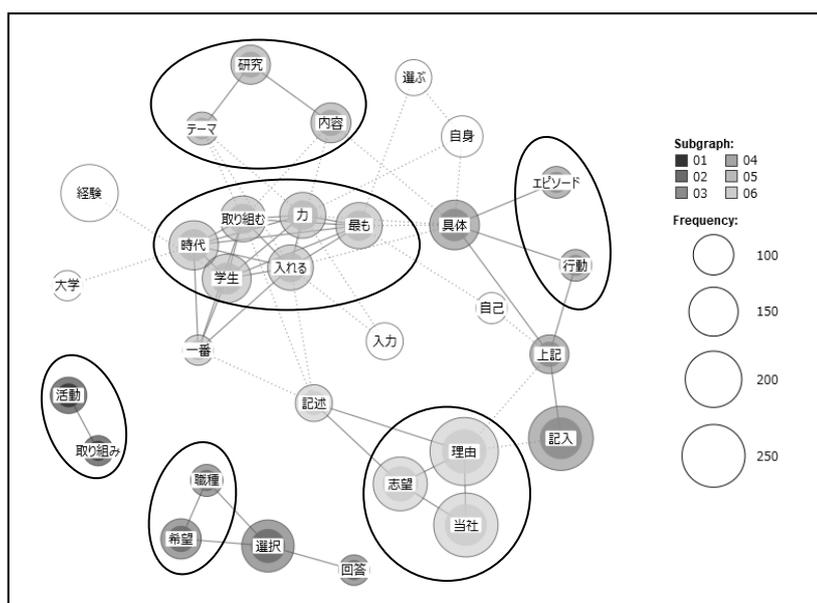


図3 2022年卒(コロナ禍後)共起ネットワーク

図 4 は 2023 年卒を対象としたコロナ禍後の共起ネットワークの結果である。2023 年卒においては、コロナ禍前の「志望理由」、「学生時代に力を入れたこと」、「学業」に加えて、2022 年卒の「希望職種」、「具体的なエピソード・行動」、さらに「活動やアルバイトの期間」や「自身の強み」、「興味・関心」、「入社後の実現」が出現頻度の多い語となっている結果が得られた。

コロナ禍後の全体的な傾向としては、各企業の質問項目にバリエーションが多くなり、特に 2023 年卒においては、企業ごとに工夫を凝らして出題していることが読み取れた。

以上の結果から、コロナ禍前とコロナ禍後の共起ネットワークを比べると、一つずつの円の大きさが小さくなり、つまり、出現頻度が低くなり、反対に語の数が増えて、バリエーションが豊富となっていることが確認できた。

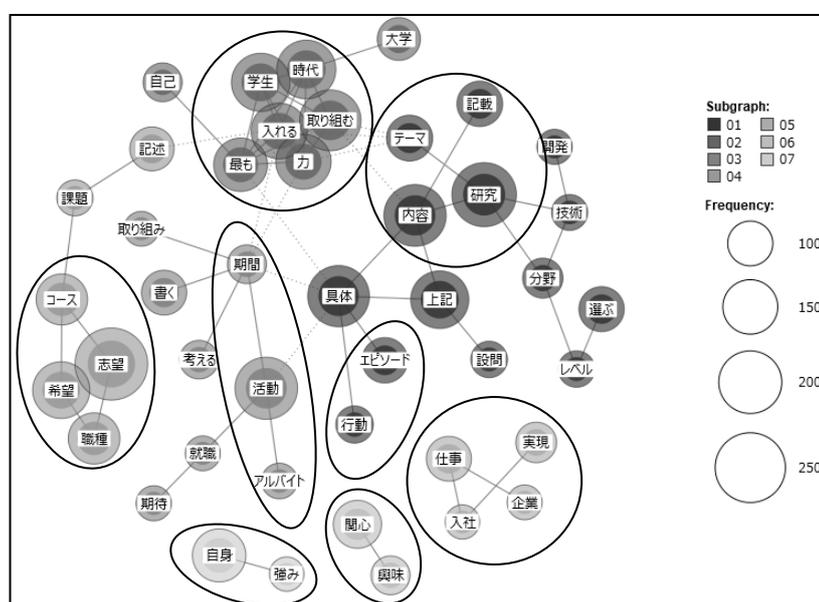


図 4 2023 年卒 (コロナ禍後) 共起ネットワーク

3. コロナ禍前後のクロス集計

表 1 のコーディングルールによって、コロナ禍前後 4 年分のエントリーシートをクロス集計分析した結果が表 3 である。「ガクチカ」、「志望理由」、「挑戦」、「資格」、「学業」、「経験」、「興味」のコードにおいて、統計的に有意な差が確認された。「ガクチカ」、「志望理由」、「挑戦」、「経験」についてはどの年においても頻繁にコードが出現していることが確認できたが、コロナ禍後にコードの出現頻度が低くなっていることが確認できた。「学業」については、コロナ禍前の 2021 年卒からコードが多く出現しているが、コロナ禍後は 2020 年卒よりも出現頻度が高いことが読み取れた。

一方で、コロナ禍後に出現頻度が高くなったコードもある。「資格」、「興味」については、コロナ禍前にはコードの出現頻度が低かったが、コロナ禍後に出現頻度が高くなっていることが確認できた。

表3 エントリーシート間のクロス集計分析(4年間)

	コロナ禍前		コロナ禍後		合計	χ^2
	2020年卒	2021年卒	2022年卒	2023年卒		
ガクチカ	86(5.01%)	82(4.87%)	92(4.55%)	92(2.83%)	352(4.05%)	20.70**
志望理由	135(7.86%)	121(7.18%)	142(7.02%)	161(4.95%)	559(6.44%)	20.41**
挑戦	21(1.22%)	24(1.42%)	14(0.69%)	19(0.58%)	78(0.90%)	11.85**
学業	86(5.01%)	119(7.06%)	117(5.78%)	216(6.64%)	538(6.20%)	8.06*
エピソード	21(1.22%)	26(1.54%)	23(1.14%)	35(1.08%)	105(1.21%)	2.15
挫折	4(0.23%)	4(0.24%)	3(0.15%)	3(0.09%)	14(0.16%)	2.14
経験	39(2.27%)	31(1.84%)	34(1.68%)	40(1.23%)	144(1.66%)	7.96*
実現	39(2.27%)	34(2.02%)	33(1.63%)	64(1.97%)	170(1.96%)	2.04
チーム	7(0.41%)	8(0.47%)	13(0.64%)	17(0.52%)	45(0.52%)	1.08
強み	8(0.47%)	6(0.36%)	11(0.54%)	18(0.55%)	43(0.50%)	1.01
興味	30(1.75%)	47(2.79%)	59(2.92%)	108(3.32%)	244(2.81%)	10.29*
職種	11(0.64%)	12(0.71%)	23(1.14%)	38(1.17%)	84(0.97%)	5.03
資格	4(0.23%)	0(0.00%)	6(0.30%)	23(0.71%)	33(0.38%)	16.96**
ケース数	1718	1685	2024	3254	8681	

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

図5については、表3を視覚化したものである。バブルプロットの大きさは、頻度の高さであり、色の濃い部分は、そのコードの出現頻度が高いという意味となる。

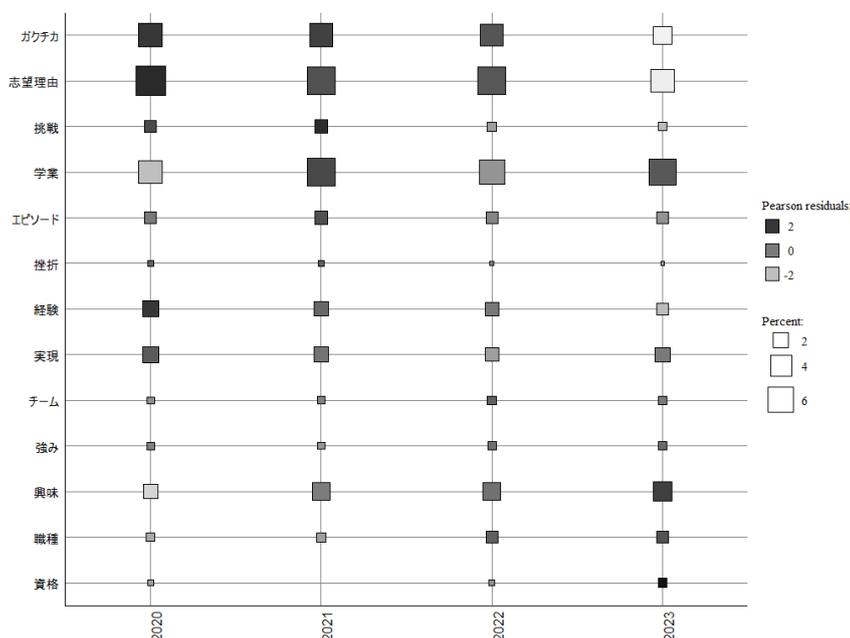


図5 クロス集計分析のバブルプロット

IV. 考察

本研究では、次世代を担う大学生の新卒採用において、企業等がコロナ禍であっても、どのような質問項目を設定しているのか、大学生にどのような経験や能力などを求めているのか

かを把握するため、テキストマイニングによる分析を行った。

テキストマイニング分析ソフトである「KH coder」を用いてコロナ禍前後のエントリーシートを分析した結果、共起ネットワークから、コロナ禍前は、どの企業も「志望理由」や「学生時代に頑張ったこと；ガクチカ」など比較的同じような質問項目が多いことが確認できた。コロナ禍後は、各企業が様々な質問項目を用意することで、多角的に大学生の特性を理解しようとしていることがわかった。

4年間のクロス集計からも、有意差が確認できた「ガクチカ」「挑戦」「経験」においては、コードの出現頻度がコロナ禍前に比べてコロナ禍後の方が低くなっていることが読み取れた。これらの結果は、新型コロナウイルス感染症の蔓延によって行動が制限され、活動が思うようにできなかった大学生を配慮するためという理由が考えられる。コードの出現頻度が低くなったとはいえ、まだまだ問われている頻度は他のコードよりも圧倒的に多い。また、「志望理由」についても出現頻度の有意差が確認された。これもコロナ禍後において、コードの出現頻度が低くなっていた。対面による企業説明会が開催されていない中で「当社を志望した理由」を問われても、オンラインという限られた情報しか提供されない説明会か、企業ホームページに記載されている内容でしか志望理由を答えられない。

小島の研究では、エントリーシートで求められる記述内容には、「志望理由」など、なぜその記述が求められているか容易に想定できるものと、求められている理由が想定しがたいものがあると述べている⁸⁾。例えば「ガクチカ」や「挑戦」、「経験」は、求められている理由が想定しがたいものに当てはまる。これらは、就職希望の大学生が記述した内容から企業の求める人材像かどうかを見極めるために、コロナ禍であったとしても、必須の質問項目であることが確認できた。

さらに、有意差が確認できた「学業」、「興味」、「資格」については、コロナ禍後の方がコロナ禍前よりもコードの出現頻度が高くなった。学業については、オンラインやオンデマンドという方法でしか学ぶことができなかったが、行動制限の中においては、むしろ大学生の本分である学業に専念できる環境にあった。加えて、資格の勉強や自分の興味・関心があることについても、打ち込める環境にあったため、コードの出現頻度が高くなったのではないかと考えられる。

以上の結果から、コロナ禍前後で質問内容に相違点が見られた場合は、一人で取り組める学業や資格取得などの質問項目が増え、また、コロナ禍前よりも、より多角的な質問が問われるという仮説を立証できた。相違点が見られなかったと考える仮説についても「エピソード」、「強み」などのコードの出現頻度がコロナ禍前後で変わらなかったため、立証ができた。学生にとっては、エントリーシートで問われると考えて事前に準備をしておいた内容が使用できなくなり、企業にとっては、それ以前の学生との比較ができなくなってしまうというデメリットが考えられるため、変わらなかったのではないかと推察できる。また、コロナ禍においても、感染対策や実施方法を工夫すれば自分のやりたいことが出来ることも多く、むしろその努力を確認したいため、コロナ禍前後で質問項目を変更しなかった可能性も考えられる。2つの仮説は相反するようであるが、エントリーシートの分析から、両方の要素が混在していることが確認できた。

今回の調査対象ではないが、今後、2024年卒の大学生に対しても、同じ傾向が続くことが予測される。入学した年にはすでにコロナ禍にあり、エントリーシートの質問項目である「自己 PR」や「学生時代に力を入れたこと；ガクチカ」に記すことのできるエピソードは、

それ以前の学生と比べてさらに乏しい。コロナ禍での行動制限の中で、部活動や留学などは経験することが困難となり、学業やアルバイトにおいても、コロナ禍前のように自由に活動できなかった。特に閉鎖された大学も多く、対面で友人と気軽に話すことも難しく、部屋の中に籠ってオンラインでの授業が中心となった。このような状況で、コロナ禍以前のような「学生時代に力を入れたこと；ガクチカ」や「周りを巻き込んで目標を達成した経験；挑戦・経験・チーム」という質問に答えることは難しいと考えられる。これらの質問項目は、自由に行動ができた場合であれば問われても答えられるが、行動制限の中ではあまり活動ができておらず、答えにくい質問項目となる。

V. おわりに

エントリーシートの項目において、コロナ禍後では、一人でも取り組める学業や資格について聞かれ、さらにコロナ禍前よりも項目が多角化していた。とはいえ、コロナ禍においても感染対策や実施方法を工夫すれば、自分のやりたいことを学生生活の中で出来ることも多く、むしろその努力を確認したいため、コロナ禍前後で質問項目を変更せず「ガクチカ」、「挑戦」、「経験」などに関する質問を設けている企業も多く見られた。

今後、高等教育機関においては、新型コロナウイルスの感染リスクに注意しながらも、コロナ禍前の活動をある程度担保する必要があると考えられる。また、大学教育を通じて、どのようにすればこの状況を乗り越えられるかを考えて行動できる大学生を育成する必要がある。さらに、コロナ禍だからこそ、希薄になりがちな「チームで動く力」や、「周りを巻き込んで何かを成し遂げる力」を育むことも求められている。

文献

- 1) 内閣府 (2020) 「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査 令和2年6月21日」
<https://www5.cao.go.jp/https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/covid/pdf/shiryo2.pdf> (26, July 2022).
- 2) 堀有喜衣. 「コロナ感染拡大が新規大卒就職に与えた影響」 『日本労働研究雑誌』 (日本労働研究機構) 729, 2021, 74-78.
- 3) 小島弥生. 就職活動に影響を与える要因の検討 (2) : 「失敗経験の記述に着目して」 埼玉学園大学紀要 人間学部篇, 2009, 9, 57-68.
- 4) 内閣府 (2022) 2023 (令和5) 年度卒業・修了予定者等の就職・採用活動に関する要請について
https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/shushoku_katsudou_yousei/2023nendosotu/yousei.pdf (26 July 2022).
- 5) 鈴木智之. 新規学卒者採用試験における選考書類の形態素と採用面接成績との関連性についての実証分析. 日本労務学会誌, 2016, 17, 19-35.
DOI:10.24592/jshrm.17.1_19
- 6) 樋口耕一. 『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して 第2版』 . 2020, ナカニシヤ出版, 東京.

- 7) 樋口耕一. テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合『理論と方法』. 2004, 19(1), 101-105. DOI:10.11218/ojjams.19.101
- 8) 小島弥生. 就職活動におけるエントリーシートへの記述に関する探索的研究：志望する職種との関連の検討. 埼玉学園大学紀要 人間学部篇, 2010, 10, 89-98.



JOURNAL OF INCLUSIVE EDUCATION

EDITORIAL BOARD

EDITOR-IN-CHIEF

Changwan HAN
Shimonoseki City University

EXECUTIVE EDITORS

Aiko KOHARA
Shimonoseki City University

Atsushi TANAKA
Sapporo Gakuin University

Chaeyoon CHO
Shimonoseki City University

Eonji KIM
Miyagi Gakuin Women's University

Haejin KWON
University of the Ryukyus

Hideyuki OKUZUMI
Tokyo Gakugei University

Ikuno MATSUDA
Soongsil University

Kazuhito NOGUCHI
Tohoku University

Keita SUZUKI
Kochi University

Kenji WATANABE
Kio University

Kohei MORI
Mie University

Liting CHEN
Meiji University

Mari UMEDA
Miyagi Gakuin Women's University

Mika KATAOKA
Kagoshima University

Nagako KASHIKI
Ehime University

Naotaka WATANABE
Shimonoseki City University

Shogo HIRATA
Ibaraki Christian University

Takahito MASUDA
Hirosaki University

Takashi NAKAMURA
University of Teacher Education
Fukuoka

Takeshi YASHIMA
Joetsu University of Education

Tomio HOSOBUCHI
Saitama University

Yoshifumi IKEDA
Joetsu University of Education

EDITORIAL STAFF

EDITORIAL ASSISTANTS

Haruna TERUYA University of the Ryukyus

Natsuki YANO University of the Ryukyus

as of April 1, 2022

JOURNAL OF INCLUSIVE EDUCATION

VOL.11 AUGUST 2022

© 2022 ASIAN SOCIETY OF HUMAN SERVICES

Presidents | KOHZUKI Masahiro & LEE, Sun Woo

Publisher | Asian Society of Human Services
#303, Kokusaiboueki Bld.3F, 3-3-1, Buzenda-cho, Shimonoseki, Yamaguchi, 750-0018, Japan
E-mail: ash201091@gmail.com

Production | Asian Society of Human Services
#303, Kokusaiboueki Bld.3F, 3-3-1, Buzenda-cho, Shimonoseki, Yamaguchi, 750-0018, Japan
E-mail: ash201091@gmail.com

JOURNAL OF INCLUSIVE EDUCATION
VOL.11 AUGUST 2022
CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

- A Survey of the Teachers-Parents Relationship Building and Parent Training in Homebound Instruction for Students with Disabilities in China; Analysis from the Point of View of Homebound Instruction Teachers
Qingtong WANG, et al. 1
- Difficulties felt by school staff in supporting children with medical care needs
Reiko HATAKEYAMA, et al. 15
- Survey on Support Needs of Braille-reading Students in Inclusive Higher Education in China
Xin WANG, et al. 29
- Effects of Simulation Exercises for Nursing Students Who Has not Experienced Clinical Training During COVID-19; An ARCS-Model Evaluation
Chizuru YAMAZAKI, et al. 43
- Effective Feedback Methods for Teachers in Field Training in Senior High Schools for Special Needs; From a Survey of Special Needs School in Akita Prefecture
Aya IMAI, et al. 56
- A Historical Study of the Beginnings of taking special classes in Japan; Focusing on Teacher Practice, Parent Movement, Professional Participation, and Educational Administration Across Disability Types
Erika HAMA 68
- Consideration on Qualitative Changes in the Job Application Before and After the COVID-19 Pandemic; Focusing on Qualitative Changes in Question Items
Megumi UENO, et al. 83

REVIEW ARTICLE

- Study on Change in School Enrollment Status of Children with Muscular Dystrophy in Schools for Children with Special Needs in Japan; Judging from a Trend of Education Policy and Medical Technology
Yukino NIITSU, et al. 94

SHORT PAPER

- Analysis of Environmental Factors Influential on the Formation of Concepts in Infancy; Use of CRAYON BOOK Data
Kiyomi UTAGAWA, et al. 110

ACTIVITY REPORTS

- Assumed Factors of Speech Suppression in a Child with a Cerebral Palsy
Reiko FUJIMURA, et al. 121
- The Current Situation and Issues of Tutorial System for International Students; Shimonoseki City University Case Study
Yukari INOMATA, et al. 131
- Educational Practice on understanding of a shape for Childhood; Based on the Perspective of Number Concepts of the CRAYON BOOK
Naomi OKADA, et al. 141